

看護大学生におけるキャリア成熟度と職業選択志望動機との関連

堀井 瀬奈¹⁾, 能見 清子²⁾

要 旨

目的:A大学看護学部生の学年ごとのキャリア成熟度を明らかにし、志望動機との関連について検討する。
方法:A大学看護学部生1~4年生300名を対象とし無記名自己式質問紙調査を行った。質問項目はキャリア成熟度、職業選択志望動機、研究者が作成した学習意欲の原動力とした。結果:回収された質問紙は241部(回収率80%)で、有効回答235部を分析対象とした。一元配置分散分析を行った結果、キャリア成熟度の値は学年間で有意差はみられなかった。重回帰分析の結果、キャリア成熟度の〔関心性〕〔自律性〕〔計画性〕全ての因子と内発的動機に有意な正の関連がみられた。考察:キャリア成熟度を高めるには内発的動機を高く維持することが重要であるという知見が得られた。

キーワード:キャリア成熟度、職業選択志望動機、看護大学生

I. 緒言

医療技術の発展や社会のニーズが多様化したことによって、看護の役割と責任は増大し、質の高い看護職の養成が求められている¹⁾。看護の質を高めるためには、看護師のキャリアを形成していくことが重要となってくる。近年、看護職者のキャリア発達の選択肢は広がりを見せており、個人の目標を明確にし、自己成長させていくこともキャリア発達の課題ともいえる。質の高い看護職を養成するために、看護学教育モデル・コア・カリキュラムが策定され、大学における看護学教育の質保証について具体的な提言がなされた。その中のひとつに、学士課程で養成される看護師の看護実践に必要な能力として、生涯にわたり継続して専門的能力を向上させる能力、看護専門職としての価値と専門性を発展させる能力をあげている²⁾。看護学生のとことから生涯学習に取り組み、看護職者としての基礎的能力を養う必要があると考えられる。

看護学生は、入学前の進路選択の時期にはすでに将来の職業範囲がある程度決定されるという特徴をもつ。そのため、入学時からすでに高い職業志向をもっていると考えられるが、学習進行に伴い、看護職に適合していな

いなど、看護職を選択したことに悩みを抱く学生も少なくはなく、看護大学を辞めてしまう学生もいる。平成23年度の看護大学の入学者数が17,457人に対し平成26年度の卒業生数が16,874人であり、実際に入学者数と比べて卒業生数は減少していることは明らかである³⁾。看護職への進路を辞退してしまう学生は自身の将来の看護師像が曖昧であり、将来の具体的なキャリアを成熟することができないものと考えられ、看護職の離職にも影響しているものと推測される。

三宅ら⁴⁾によると、教育心理学的に成熟とは、時間的経過に関連して、発達の方向・順序が規定される過程であり、発達初期の経験がその後の学習に効果をもたらすことが重視されている。看護職を目指す上で初期段階と言える看護学生時にキャリアを成熟させることは、その後の看護師としてのキャリアにも影響することが考えられる。キャリアについて検討していく上で重要な概念にキャリア成熟度がある。キャリア成熟度とは、成人がこれからの人生や生き方、職業生活、余暇生活についての程度成熟した考え方を持っているかを表すものであり、このキャリア成熟度は、現在のキャリアの発達状態や成熟していく過程も含んでいる⁵⁾。新人看護師対象の研究では、キャリア成熟度の高い看護師は、「自分の長所・短所・特徴を理解している」「看護職が自分に適した職業であると知覚している」「やりがいを感じている」という特徴を持つことを明らかにしている⁶⁾。

また、職業志望動機など看護職への志向が入学後の学習態度や学習意欲などに影響するとも言われている⁷⁾。看護職を志した動機は、学生が意欲的に学習に取り組

1) Sena Horii

公立昭和病院

2) Kiyoko Nohmi

創価大学看護学部

み、キャリアを積んでいくための具体的な将来像を描く上での原動力になると考えられる。つまり、自分の人生について成熟した考えを持つとされるキャリア成熟度が高い学生は、看護職への志向が強いのではないかと考えられる。また、石田ら⁸⁾の調査では、看護職志望が強まった人が最も少なく、弱まった人が最も多かったのは2年次であったという結果が出ており、キャリア成熟度においても学年で差があるのではないかと考えた。先行研究では、志望動機として「資格がとれ、一生続けられる職業だから」「収入が安定しているから」などの経済面・自立要因の回答数が多い⁹⁾ことが明らかとなっているが、A大学は看護師のみの資格取得や附属病院、修士課程がないことなど、キャリアを描く上で他大学とは異なる可能性が高い。また、筆者らで討議を重ねていく中でA大学看護学部生が学習に対する意識を高める要因には、「先輩が築いたものを後輩に繋ぎたい」「親孝行のため」「大学に貢献するため」など、他大学にはみられない特徴があり、そうした要因が学習の原動力になっているのではないかとこの考えに至った。このような学習意欲の原動力となるものも、キャリア成熟度と関連していると考えられる。

先行研究ではキャリア成熟度と職業的アイデンティティとの関連の研究はみられるが、キャリア成熟度と職業選択志望動機との関連を検討した研究はみられない。A大学看護学部の学生のキャリア成熟度、またキャリア成熟に影響すると言われる職業選択志望動機との関連を明らかにすることで、看護学生に対する学習の動機づけや、キャリアを発達していく上での支援の示唆を得ることができると考える。このことから、本研究では、A大学看護学部生の学年ごとのキャリア成熟度を明らかにし、職業選択志望動機との関連について検討する。

II. 研究方法

1. 用語の定義

キャリア成熟度：成人がこれからの人生や生き方、職業生活、余暇生活についてどの程度成熟した考え方を持っているかを表すもの⁵⁾。

(キャリア成熟度の下位尺度)

キャリア関心性：自己のキャリアに対して、積極的な関心をもっていること

キャリア自律性：自己のキャリアへの取り組み姿勢が、自律的であること

キャリア計画性：自己のキャリアに対して、将来展望をもち、計画的であること

2. 対象

A大学看護学部在籍し、2017年度春学期に履修登録した看護学部生1～4年生を対象とした。

3. 調査期間

研究対象である看護学部3年生の看護学実習の時期と重なると学生の負担になり、研究内容に影響すると考え、実習開始前の2017年6月～7月とした。

4. 調査方法

無記名自己記入式質問紙調査

1) 配布・回収方法

講義終了直後の休み時間や放課後の約10分間を用いて集合形式にて配布し、回収箱を設け強制力が働かないよう研究者らはその場を離れ回収した。その後は、取り付け式鍵付回収箱にて回収した。授業に支障が生じることがないように、次の時間に授業がない休み時間を利用した。

5. 調査内容

1) キャリア成熟尺度

キャリア成熟度に関しては、坂柳⁵⁾らが開発し、信頼性・妥当性が検証された成人キャリア成熟尺度を使用した。質問項目は、[関心性][自律性][計画性]の3領域の態度特性を設定し、それぞれ9項目計27項目の質問で構成され、「5：よく当てはまる」「4：やや当てはまる」「3：どちらともいえない」「2：やや当てはまらない」「1：全く当てはまらない」の5件法で回答を求めた。下位尺度の得点範囲は、9～45点に分布し、この得点が高いほどキャリア成熟度が高いことを意味する。なお、尺度については作成者に使用許可を得た。

2) 職業選択志望動機

一柳ら⁹⁾が作成した「看護学生の職業選択動機に関する尺度」を使用した。

[内発的動機] 人の役に立ちたい、人を助けたいと思ったから、人と関わる仕事をしたかったから、人の身体や心に関する学問に興味があったから、社会に貢献したいから、[経済面・自立] 資格がとれ一生続けられる職業だから、収入が安定しているから、経済的に自立しているから、[過去の体験] 自分の病気・通院の体験から、家族・身近な人の病気・通院の体験から、[夢・憧れ] やりがいのある職業だから、幼い頃あこがれていた職業だから、医療系のテレビやドラマの影響を受けたから、[他発的動機] 親や教師に勧められたから、

他にやりたいことがなかったから、看護の学校が近かったから、〔その他〕の16項目6因子で質問が構成されている。本研究では〔内発的動機〕〔経済面・自立〕〔過去の体験〕〔夢・憧れ〕〔他発的動機〕の5因子15項目を使用し「5：よく当てはまる」「4：やや当てはまる」「3：どちらともいえない」「2：やや当てはまらない」「1：全く当てはまらない」の5件法で回答を求めた。なお、尺度については作成者に使用許可を得た。

3) A大学看護学生の特性

A大学看護学生の特性については、学習意欲の原動力となる要因を筆者らで討議し、質問項目を作成した。「先輩が築き上げたものを受け継いでいきたいという思いがあるから」「支援者の期待に応えるため」「友人など、周囲の人が頑張っているから」「親孝行になるから」「後輩に良いものを残していきたいと思っているから」等の項目を抽出し質問項目を作成した。「5：よく当てはまる」「4：やや当てはまる」「3：どちらともいえない」「2：やや当てはまらない」「1：全く当てはまらない」の5件法で回答を求め、7項目の合計点で一つの因子とし、因子名を〔学習意欲の原動力〕とした。内発的動機は、人の役に立ちたい、人と関る仕事がしたい、と抽象的な動機であり、学習意欲の原動力は、A看護大学生にとって、先輩や後輩のため、親孝行のため等、より具体的で身近な動機となるものと考えた。

6.分析方法

キャリア成熟度の質問項目の中の逆転項目（9項目）の逆転処理を行った。

筆者らで作成した学習意欲の原動力はクロンバックの α 係数を算出したところ.902であったため因子として使用した。

キャリア成熟度、職業選択志望動機、学習意欲の原動力の質問は記述統計量を算出し、キャリア成熟度は学年別での平均値、学年ごとの違いを見るために一元配置分散分析の算出を行った。またキャリア成熟度と職業選択志望動機、学習意欲の原動力との間の相関関係を求めた。相関関係は、Pearsonの順位相関を用いた。キャリア成熟度得点を従属変数とし、職業選択志望動機・学習意欲の原動力を独立変数とし、ステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った。統計的検定については統計ソフトSPSS Version22を使用した。

7.倫理的配慮

本研究はA大学看護学部生研究倫理審査会の承認を得て行った。（承認番号2017-005）

1) 本研究では、対象となったA大学看護学部生に研究の趣旨、研究方法、結果の活用、対象者への倫理的配慮、質問紙の配布・回収方法、個人名は特定されないこと、成績には影響しないことなど学生への不利益が生じないことの説明を行い、調査協力を得た。質問紙の冒頭部分にある「同意する」という項目に○を付けてもらうことで同意を得た。

2) 得られたデータはパスワードをかけた電子ファイルに保存し、回収した質問紙は鍵付きのロッカーで厳重に管理を行った。研究終了後には破棄、消去するとした。

III.研究結果

1.対象者の概要

本研究の対象は、A大学看護学部生1～4年生とし、300名に配布した。1年生59名、2年生60名、3年生66名、4年生56名の計241名より回答が得られ、回収率は80.3%であった。職業選択志望動機、学習意欲の原動力の項目が全て無記名であった6部を除く有効回答235部（有効回答率97.5%）を分析対象とした。A大学のカリキュラムは、学術文章作法など大学共通科目として18単位（必修）、構造機能学など専門基礎科目として26単位（必修）看護の専門分野、臨地実習など看護専門科目として71単位（必修）、自由選択科目10単位以上（選択）、合計125単位の取得を卒業要件としている。4年間の臨地実習科目は、1年次春学期に基礎看護学実習I、2年次秋学期に基礎看護学実習II、3年次春学期から秋学期にかけて成人看護学急性期・慢性期、老年、精神、小児看護学実習、4年次春学期に母性、地域在宅看護学実習、秋学期に看護実践統合実習で構成されている。

2.キャリア成熟度、学習意欲の原動力の得点状況

1) キャリア成熟度の得点状況

キャリア関心性の平均値は1年生34.85点、2年生34.62点、3年生36.00点、4年生35.63点と、2年生で少し下がり、3年生から高くなっていた。キャリア自律性の平均値は1年生34.78点、2年生35.42点、3年生35.95点、4年生36.61点と、学年が上がるたびに徐々に上昇していた。

キャリア計画性の平均値は1年生31.50点, 2年生31.06点, 3年生32.19点, 4年生33.14点と, 2年生で下がり, その後徐々に高くなっていった。

学年の違いを見るために一元配置分散分析を行ったところ, キャリア成熟度の値は学年間で有意差がみられなかった。よって, キャリア成熟度とその他の因子との関連をみる際は学年別ではなく, 全体のキャリア成熟度との関連をみていくこととした。

2) 学習意欲の原動力の得点状況

学習意欲の原動力の学年別平均値は, 1年生3.77点, 2年生3.91点, 3年生3.97点, 4年生4.16点と学年が上がるごとに上昇していた。

7項目全ての平均値が3.5点以上あり, 特に4.0点以上ある得点の高い項目は「親孝行になるから(4.44点)」「支援者の期待に応えるため(4.24点)」「友人など, 周囲の人が頑張っているから(4.15点)」であった。

3. キャリア成熟度と職業選択志望動機・学習意欲の原動力との関連

キャリア成熟度の下位尺度と職業選択志望動機の6因子, 学習意欲の原動力の因子との関連をPearsonの順位相関係数を用いて求めた(表1)。相関係数を求めた結果, キャリア関心性では内発的動機($r=0.403$, $P<0.001$), 学習意欲の原動力($r=0.349$, $P<0.001$)で正の相関, 他発的動機($r=-0.230$, $P<0.001$)で負の相関がみられた。キャリア自律性では内発的動機($r=0.372$, $P<0.001$), 学習意欲の原動力($r=0.357$, $P<0.001$), 夢・憧れ($r=0.184$, $P<0.01$)で有意な正の相関, 他発的動機($r=-0.289$, $P<0.001$)で有意な負の相関がみられた。キャリア計画性では内発的動

機($r=0.380$, $P<0.001$), 学習意欲の原動力($r=0.295$, $P<0.001$), 夢・憧れ($r=0.199$, $P<0.01$), 経済面・自立($r=0.179$, $P<0.01$)で有意な正の相関, 他発的動機($r=-0.222$, $P<0.001$)で有意な負の相関がみられた。

キャリア成熟度の下位尺度である関心性・自律性・計画性を従属変数とし, 職業選択志望動機の6因子, 学習意欲の原動力の因子を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った(表2)。キャリア関心性においては, [内発的動機, $\beta = 0.255$ ($P<0.001$)] [学習意欲の原動力, $\beta = 0.216$ ($P<0.01$)] [他発的動機, $\beta = -0.216$ ($P<0.01$)] [経済面・自立, $\beta = 0.134$ ($P<0.05$)], $R = 0.499$, 調整済み $R^2 = 0.236$ であった。キャリア自律性においては, [内発的動機, $\beta = 0.251$ ($P<0.001$)] [他発的動機, $\beta = -0.240$ ($P<0.001$)] [学習意欲の原動力, $\beta = 0.231$ ($P<0.001$)], $R = 0.495$, 調整済み $R^2 = 0.235$ であった。キャリア計画性においては, [内発的動機, $\beta = 0.243$ ($P<0.001$)] [他発的動機, $\beta = -0.214$ ($P<0.001$)] [経済面・自立, $\beta = 0.165$ ($P<0.01$)] [学習意欲の原動力, $\beta = 0.169$ ($P<0.05$)], $R = 0.469$, 調整済み $R^2 = 0.207$ であった。多重共線性の診断においては, VIFは全て1.4未満であり, 独立変数間に多重共線性は生じていないことが確認された。

IV. 考察

1. キャリア成熟度からみた学年比較

本研究ではキャリア成熟度の下位尺度である[関心性]と[計画性]において, 1年生から2年生にかけて一旦低下し, 3年次で上昇するという結果が得られた。

[関心性]に関して坂柳⁵⁾は「自己のキャリアに対して, 積極的な関心をもっているか」と定義している。本研究対象者の2年生は, 看護過程を展開する実習を

表1 キャリア成熟度と職業選択志望動機・学習意欲の原動力の相関関係

		夢・憧れ	経済面・自立	過去の体験	内発的動機	他発的動機	学習意欲の原動力
キャリア関心性	Pearsonの相関係数	.120	.151*	.036	.403**	-.230**	.349**
	有意確率(両側)	.067	.020	.587	.000	.000	.000
キャリア自律性	Pearsonの相関係数	.184**	.102	.006	.372**	-.289**	.357**
	有意確率(両側)	.005	.119	.922	.000	.000	.000
キャリア計画性	Pearsonの相関係数	.199**	.179**	.090	.380**	-.222**	.295**
	有意確率(両側)	.002	.006	.170	.000	.001	.000

** 相関係数は1%水準で有意(両側)

* 相関係数は5%水準で有意(両側)

表2 キャリア成熟度と職業選択志望動機・学習意欲の原動力の関連因子

n=235

	キャリア関心性			キャリア自律性			キャリア計画性		
	ベータ	p	VIF	ベータ	p	VIF	ベータ	p	VIF
夢、憧れ									
経済面、自立	.134	.032	1.164				.165	.090	1.154
過去の体験									
内発的動機	.255	.000	1.343	.251	.000	1.213	.243	.000	1.328
他発的動機	-.216	.000	1.077	-.240	.000	1.014	-.214	.001	1.075
学習意欲の原動力	.216	.001	1.226	.231	.000	1.219	.169	.010	1.219
R	.499				.495			.469	
R ²	.249				.245			.220	
調整済みR ²	.236				.235			.207	

重回帰分析

説明変数(6変数)はステップワイズ法

経験していない。そのため、各教科の単位取得が最優先の目標となり、座学中心の学習では学習意欲が低下し、自己のキャリアに積極的な関心をもつことが難しくなるものと考えられる。

〔計画性〕に関しては「自己のキャリアに対して将来展望をもち、計画的であるか」と定義されている⁷⁾。〔関心性〕と同様に、座学中心で専門科目の難しさや看護実践との関連付けの困難さなどにより学習意欲が低下することで、自己のキャリアに対して積極的な行動を起こせず、計画的に順序よく学習を進めていくというよりは、目先の課題を終わらせることに精一杯な状態であり、〔計画性〕も2年生で低下しているのではないかと推測される。

このことから〔関心性〕〔計画性〕が低下する2年次に、学習意欲を高め、将来展望をもちながら計画的に学習を進められるようなキャリア教育やカリキュラムの検討、教員の情緒的支援¹⁰⁾等のキャリア支援が求められると考える。

〔自律性〕は、学年が上がるごとに上昇しているという結果であった。〔自律性〕は「自己のキャリアへの取り組み姿勢が、自律的であるか」と定義されている⁵⁾。自律というのは、自分の行動を自分の立てた規範に従って正しく規制することである¹¹⁾。学年進行と共に進路変更の選択が決断しがたく、看護師になるための学習時間や授業料を費やした結果、キャリアへの取り組み姿勢が自律的になっていると考える。

また、どの下位尺度も3年生から上昇し、4年生には高い値を出している。4年生は専門分野実習を全て修了し、看護師という職業を間近で体験し、困難さも

感じながら将来の看護師像を描きつつある段階であると言える。実習を乗り越えたという自信に加え、就職活動や国家試験などが目前にあり、看護師への道が他の学年と比べ抽象的ではないということも、この結果から捉えることができる。

しかし、一元配置分散分析を行ったところ、キャリア成熟度の値は学年間で有意差がみられなかった。キャリア成熟とは、時間的経過に関連して、発達の方向・順序が既定される過程であるが、A大学の学生は学年に関係なく、人生や生き方、職業生活、余暇生活など具体的な展望についての考え方には差はみられなかった。どの学年においてもキャリアに対しては、まだ遠い未来であり、学年によって考え方が大きく変わることはないことが推察された。

2. キャリア成熟度と職業選択志望動機との関連

重回帰分析を行った結果、キャリア成熟度の下位尺度である〔関心性〕の有意な関連因子は、順に、内発的動機、学習意欲の原動力、他発的動機、経済面・自立であった。〔自律性〕に対しては、順に内発的動機、他発的動機、学習意欲の原動力であった。〔計画性〕に対しては、順に内発的動機、他発的動機、経済面・自立、学習意欲の原動力であった。

内発的動機においては、〔関心性〕〔自律性〕〔計画性〕の全てと有意な正の関連がみられた。このことからキャリア成熟度を高めるためには、内発的動機を維持することが重要であるという知見が得られた。北村¹²⁾は、内発的動機づけとは「活動それ自体が目的で、その活動の遂行から得られる満足以外の報酬を期待せずに行う

行動を支える動機づけ」であると述べている。また、Deci¹³⁾の研究では、報酬のある群とない群とで自発性の違いを実験し、報酬があった群では、はじめは熱心にやり続けるが3日目になると興味を失い、報酬なしの学生は興味をもって自発的にやり続けたという結果が出ている。このことから、単位の取得や成績を目的とするのではなく、看護の学習そのものに自発的に取り組むことは、内発的動機を維持するために必要であるということが考えられる。遠藤¹⁴⁾は、内発的動機は、学習意欲に影響するだけでなく、学習を継続させるために重要であると述べている。自己のキャリアを形成していく上で学習を継続させるのは必須であると考えられる。今自分たちが学習していることに対して自発的に取り組み、継続していくということは、キャリアへの意識を成熟させることに繋がると考えられる。そのため、キャリア成熟度と内発的動機は関連していると推測できる。このことから看護学生が学習に意欲的に取り組み、キャリアを発達していくためには、内発的動機が重要であり、一つの学習に対して看護の意味づけや奥深さ、やりがいを実感できるような内発的動機を高める学習支援が必要であるという示唆が得られた。

他発的動機においても〔関心性〕〔自律性〕〔計画性〕の全てに有意な負の関連がみられた。つまり、キャリア成熟度が高い学生は、看護師を選択することに対して積極的な理由をもってしていることを示している。他発的動機の平均値は全体で2.00点であり、A大学看護学生のほとんどは他発的動機に対し「あまり当てはまらない」と答えている。このことから、A大学の看護学生の多くは自らの意志で看護職を志していると考えられる。

経済面・自立においては、〔関心性〕〔計画性〕と有意な正の関連がみられた。キャリアに対し積極的な関心を持ち、将来展望をもって計画的であるといった、キャリア成熟度の〔関心性〕〔計画性〕が高い学生は、「資格がとれる」「収入が安定している」「経済的に自立している」という経済面・自立の志望動機が強いということが明らかとなった。先行研究では、経済面の要因が強い学生はキャリアコミットメントが低いという結果が出ている¹⁵⁾。しかし、看護学生は卒業資格と同時に看護師等の国家試験受験資格を得ることから、看護師等の資格取得を主たる目的に入学した学生が多いという結果がでて¹⁶⁾。また、F.ハーツバーグ¹⁷⁾の「動機づけ・衛生理論」では、仕事などに対する満足をもたらす要因（動機づけ要因）と不満をもたらす

要因（衛生要因）が異なることを示している。動機づけ要因には、達成、承認、仕事そのもの、責任、および昇進が挙げられる。衛生要因には、会社の政策と経営、監督、対人関係、作業条件、および給与などが挙げられる。衛生要因については、不快さを回避する欲求であり、動機づけ要因は成長や自己実現に対する欲求であるとしている。本研究の経済面・自立はこの理論で言う衛生要因であると言える。これらのことから、収入がいいことや資格が取れるなどの因子は、キャリア成熟度を高める要因ではなく、維持するためのものであると考えられる。

V. 研究の限界と今後の課題

本研究では、縦断研究でないため、学年特性による結果への影響も考えられる。具体的にどのような内容が内発的動機を維持できるのかという調査はしていないため、今後検討していく必要がある。

VI. 文献

- 1) 文部科学省 (2013), 看護系大学教員養成機能強化事業推進委員会, 2007年10月31日, http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/iryujinzai/1339334.htm
- 2) 文部科学省 (2017), 「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 平成29年10月, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf
- 3) 日本看護協会出版会: 看護関係統計資料集, 日本看護協会出版会, 東京都, 2016.
- 4) 三宅和夫, 北尾倫彦, 小嶋秀夫: 教育心理学小事典, 191-192, 東京都, 有斐閣, 1991.
- 5) 坂柳恒夫: 成人キャリア成熟尺度の信頼性と妥当性の検討, 愛知県教育大学研究報告, 48, 115-22, 1998.
- 6) 中原博美, 亀岡智美: 新人看護師の職業的成熟度に関する研究—現状及び関係する特性に焦点を当てて—, 看護教育学研究, 9 (1), 21-34, 2010.
- 7) 波多野梗子, 小野寺杜紀: 看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化, 日本看護研究学会雑誌, 21 (4), 21-28, 1993.
- 8) 石田真知子, 柏倉栄子, 他: 学年進行に伴う看護学生のキャリアコミットメントの変化, 東北医短部紀要, 10 (2), 83-89, 2001.

- 9) 一柳陽子, 谷山牧, 山崎千寿子, 他: 看護学生の入学・職業選択動機の実態と構造, 川崎市看護短期大学紀要, 14 (1), 21-2, 2009.
- 10) 菊池昭江: 看護学部3年生の学習意欲とソーシャルサポートの特徴-1年次と3年次の縦断的調査より, 日本看護学教育学会誌, 13 (3), 29-37, 2004.
- 11) 新村出: 広辞苑 (第5版), 岩波書店, 1998.
- 12) 北村英哉: 「冷たい心と熱い心: 認知, 感情, 動機づけ」, 118-119, 有斐閣双書, 東京都, 2001.
- 13) Deci, E.L.: Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation, Journal of Personality and Social Psychology, 18, 105-115, 1971.
- 14) 遠藤裕子: 看護大学生の進路選択・決定要因-大学のキャリア支援の課題-, 日本看護学会論文集, 46, 103-106, 2016.
- 15) 室津史子, 贅育子, 重本津多子, 他: 看護学生の看護師に対するイメージおよびキャリアコミットメント-学年による比較-, ヒューマンケア研究学会誌, 5 (2), 37-44, 2014.
- 16) 田島真智子, 滝内隆子: 新卒看護師の離職要因と離職時期及び新卒看護師・看護大学生の職業志望動機-1990年~2010年の文献を通して-, 岐阜看護研究会誌, 4, 43-48, 2012.
- 17) Frederick Herzberg (1966) / 北野利信 (1968). 仕事と人間性, 83-100, 東洋経済新報社, 東京都.